

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：33921

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20037

研究課題名（和文）戦後文学者における青年期の仏教言説受容の比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Acceptance of Buddhist Discourse among Japanese Post-war Novelists in their Youth

研究代表者

橋本 あゆみ（HASHIMOTO, Ayumi）

愛知淑徳大学・文学部・講師

研究者番号：10962780

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本近代文学の戦後作家が青年期に仏教的言説をどのように受容し、後の創作活動に活かしたかを検討するものである。主な対象作家は大西巨人と野間宏とした。大正期から昭和初期まで、倉田百三『出家とその弟子』に代表される修養思想としての仏教文化が知識青年に影響を与えた。マルクス主義的な社会改良が不可能な戦時下、親鸞は民衆とともに活動した実践者として、道元は知的研鑽の体現者として、大西や野間ら知識青年の精神的立脚点となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

個別の作家や創作物に限定して考察するのではなく、教養形成期の作家たちを共時的に取り巻いた仏教言説の影響に着目したことは新しい手法である。これにより、仏教が戦争参与を強める一方、戦後に作家となる知識青年は時局との緊張関係の中で、望ましい社会参画や真理探究のロールモデルとして宗祖イメージを構築しようとした傾向がわかった。宗旨理解の正統さは問題とせず、社会で受容された仏教イメージを重視し前述の傾向を明らかにしたことが、本研究の独自性である。

研究成果の概要（英文）：This study investigates how postwar writers of modern Japanese literature accepted Buddhist discourse in their youth and utilized it in their creative activities. I mainly examined the two novelist, Onishi Kyojin and Noma Hiroshi.

From the Taisho period to the early Showa period, Buddhist culture influenced intellectual youth, as a discourse of self-cultivation. For example, Kurata Hyakuzo's "The Priest and His Disciples" gained a large readership. Young intellectuals had the impression that Shinran was a practitioner who worked with the people, and that Dogen was an outstanding intellectual disciplinarian. As Marxist social reform was suppressed in the wartime, these Buddhist monks became the spiritual foundation for Onishi and Noma.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：日本近代文学 戦争文学 アジア太平洋戦争 仏教 知識人 修養 大西巨人 野間宏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 大西巨人は、日本陸軍兵営を舞台とする長編小説『神聖喜劇』(1960～1980年)で戦後文学者として一定の同時代評価を受けたが、学術的研究が進んだのは2000年代以降である。2014年に作家が没して後、複数の研究者が旧蔵書調査を行っており、その過程で大西が曹洞宗宗祖・道元に関する書籍を多数所蔵し、自作の栞まで付けていたことがわかった。道元への関心そのものは大西の著述から知られていたものの、従来はマルクス主義からの影響に比べて軽視されてきた。よって、大西が道元に特段の関心を抱いた要因や時代的背景について調査検討の必要があると考えた。

(2) 野間宏は大西巨人と同世代で、代表的な戦後文学者の一人である。青年期にマルクス主義思想を受容し思想弾圧を体験したこと、徴兵経験をもち陸軍兵営の抑圧的環境を描く長編を戦後に発表したことなど、複数の点で大西と比較検討が可能である。仏教についても、野間は浄土真宗宗祖・親鸞への関心がよく知られるが、その要因は作家個人の家庭環境に主に求められ、創作物と仏教との関わりも作家の思想的変遷という縦軸で論じられることが多かった。そのため大西ら同時代作家の仏教受容と対照する試みはほとんどなかった。

(3) 仏教史の領域では、石井公成監修『近代の仏教思想と日本主義』(法蔵館、2020年9月)、近藤俊太郎『親鸞とマルクス主義 闘争・イデオロギー・普遍性』(法蔵館、2021年8月)など、近代日本の戦時期における思想・社会と仏教に関する精力的研究が続々と発表されている。しかし作家を対象とする検討や、戦中の仏教言説受容と戦後の創作物との関わりに着目した論は少なく、文学研究側からの応答として取り組む余地があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は大西巨人と野間宏を主な分析対象に設定し、彼ら日本近代文学の戦後作家が青年期に触れた仏教言説を調査検討するとともに、その言説受容から構築された仏教イメージが戦後の創作活動にどのような影響をもたらしたかを明らかにすることを目的とする。個別の作家研究の枠組みの中で仏教言説の受容を考察するのではなく、満洲事変前後からアジア太平洋戦争期における、共時的な言説流通の場を想定することで、それぞれの作家が受けた文化的影響の共通性や反応の違いを浮き彫りにすることを目指す。

1915～1916年に生まれた大西や野間の世代は、社会へのコミットメントの道を示し知識青年に強い影響を与えてきたマルクス主義が思想統制により退潮し、国粹主義的言説が拡大していく1930年代(昭和5～15年)に教養形成を行った。浄土真宗が仏法的真理の追究と世俗権力への適応を切り離す「真俗二諦」を掲げ戦時政策への貢献を打ち出す状況や、禅の克己的イメージと「武士道」的忠君を通俗的に重ね合わせる言説などに接し、さらにマルクス主義(唯物論)と宗教は原則として否定しあう関係にあることを理解していたにもかかわらず、戦後作家たちは仏教イメージに一定の積極的可能性を認め、文学的著述に持ち込んでいるように見える。彼らが仏教および宗祖のイメージに基づき表現しようとしたものの内実、そして仏教が正統的教義の範囲を超えてもたらした文化的効果の一端を、本研究によって明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 二松學舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト「現代文学芸術運動の基礎的研究——大西巨人を中心に」(2014～2016年度)への参加期間内に主に調査し、論文「蔵書にみる大西巨人の道元受容——『神聖喜劇』における引用の効果——」(山口直孝編『大西巨人 文学と革命』翰林書房、2018年3月)で考察した大西巨人の道元受容の痕跡(自作栞入り蔵書など)を研究の土台として、関連資料のさらなる収集を行う。具体的には、大西が触れ得た一般読者向けの道元解説書や、戦時下における禅と「武士道」さらに「日本的」であることを結びつける言説の分析に資する文献を探索・精読する。

(2) 野間宏の親鸞および仏教に関連する創作・著述について、仏教史の領域で研究が進展している近代日本で流布した親鸞のイメージを参照しながら、作家の個人経歴よりもメディア等を通じた言説環境に注目して考察する。また、1930年代を中心に同人誌『三人』で野間と活動を共にした富士正晴も、師と慕う詩人・竹内勝太郎から道元について教えを受けていたことから、同世代による仏教言説受容の一例として参考とする。

(3) 1930年代から戦時下における政治的要請が、仏教関連において青年の社会参画の信念にどのように関わったかを創作者に限らない範囲でも確認するため、仏教に関心を持つ当時の青年を読者対象とする雑誌等に載った言説を調査する。

4. 研究成果

(1) 大西巨人については、二松學舎大学柏図書館に寄託されている旧蔵書のリストを利用し、仏教に関連したもので書き込みか葉がある書籍を改めて抽出した。このリストは現状、旧蔵書調査参加者に限定して共有されているデータであり、公開を目指した共同整理の途上にある。

この作業を踏まえ、2018年の論文「蔵書にみる大西巨人の道元受容」では影響の考察を割愛した、家永三郎『日本道徳思想史』(岩波書店、初版1954年4月、大西蔵書は改版1977年1月)の再検討を試みることにした。大西蔵書では60ページ目に「道元」とペン書きされた葉が入っており、そこには「教団が世俗的政治勢力に接近するのを禁止して、出家の高次の立場を明かにした。」等の記述がある。ここから、世俗権力に対する不羈独立という面で大西が道元に注目していたことがわかる。読書痕跡が1977年刊行の新版に残る点からは、大西が1980年の長編小説『神聖喜劇』完結に向けて、「百尺の竿頭にさらに一步をすすむべし」という道元の言葉を鍵とするクライマックス場面の執筆に備えて、道元の解釈を深化させた様子が推測できる。

葉や書き込みは見られないが、家永三郎『歴史家のみた日本文化』(文藝春秋社、1965年9月)も旧蔵書に含まれていることがわかった。本書では道元と親鸞が合わせて考察されている箇所があり、やはり両者に対し「現行集団体制をなんらかの形で前提」するような「伝統的な一元的現実主義を克服する端緒」(85~86ページ)となる改革精神を見出している。大西と家永に直接的な交流の痕跡はないが、3歳違いの同世代人だ。1973年には、大西巨人の長男の赤人が身体障がいや理由に高校入学を拒否された問題をきっかけに生まれた運動団体の機関誌『人権と教育』誌上で、家永がインタビューに応じている。仏教と精神的独立性をめぐる認識について、大西と家永に同代的な共通感覚を指摘できる可能性があり、今後の研究につながる発見となった。

また、継続的な旧蔵書調査の過程で大西巨人の祖先に関連する肉筆記録を発見することができ、巨人の曾祖父が福岡黒田家の家臣に仕え、自身も禅宗寺院の檀家であったとの記述が確認できた。これまで大西の父が神道に詳しい立場であったことは知られていたが、仏教との関わりははっきりしていなかった。今回初めて、一次資料から大西巨人が禅および道元について知る機会を持てる環境であったという証拠が得られた。

なお、仏教関係については直接論究していないものの、大西巨人『神聖喜劇』における引用が、歴史叙述と語り手の思考を動的に結び合わせ、認識の更新を促していく独自の役割を持つことを論じた「大西巨人『神聖喜劇』 論理のネットワークを駆けめぐる数奇な旅」(『ユリイカ』806号、2023年7月)は、本研究が発想の下支えとなっている成果である。

(2) 戦前および戦時期に流布した親鸞のイメージと野間宏については、仏教史領域の研究成果から学ぶ中で、倉田百三『出家とその弟子』(1917年初刊)の学生や知識人に対する文化的影響の大きさを認識し直すこととなった。卓越した宗祖ではなく苦悩する「人間」としての親鸞は、知識青年の共感を集め昭和に入っても読みつがれた。日本近代文学館の閲覧室を利用して初出雑誌『生命の川』を閲覧したことで、広告欄から大正教養主義の柱のひとつである『白樺』の読者層との重なりも確認することができた。自己修養と表裏一体となる利他の志向、さらに民衆の中に入り行動する親鸞というイメージは、マルクス主義への弾圧が激化する昭和10年前後から終戦まで、さらに共産主義国の現実が露呈していく戦後冷戦期において、社会改良の理想を代補するものであったといえよう。野間宏が、1960年前後に親鸞と出会い直し、以降は親鸞とマルクス主義を往還しながら文学活動に取り組んだことについても、親鸞受容の文化史的文脈の中に置くことで、いっそう広い観点から分析できると考える。

なお、野間とともに京都で青年期を過ごした富士正晴についても、『三人』や戦後の雑誌に寄稿したものなど複数の記事を調査したが、明確に道元や親鸞の捉え方が読み取れるものは見当たらず、今後の課題とすることとした。一方、『三人』28号(1942年6月)に竹内勝太郎が寄せた短文「親鸞」では、親鸞が「基督教的」に捉えられ流布していることに不満を表明し、「弱さ」を表面に押し出し支えているものは「比類なき強さ」であると述べている。これは当時の通俗的な親鸞イメージを裏面からよく伝えている。武田泰淳などのように、仏教とキリスト教を創作活動の中で共に重要な位置に置き、ある共通の道徳的基準を求めようとしたと思われる戦後作家もいるが、そのような融通無碍ができるのも、当時の知識青年たちが細かな宗旨への関心よりも修養の手本としてしばしば仏教言説を受容していたからこそではないだろうか。

(3) 旧制大学生程度の知識青年が戦前に接した仏教言説を知る目的で、全日本仏教青年会連盟機関誌『青年仏徒』を縦覧した。各宗派の青年信徒の大同団結組織として、海外布教に対する「使命」や「奉公」を年を追う事に強調していく同誌から着想を得て、在外日本人の民族意識や対外的な「日本精神」宣揚に用いられていく仏教言説についても調査したいと考えた。その中で、神道・仏教に造詣が深い国文学者の鈴木暢幸がブラジル日系移民向けに行った1939年の講演の記録冊子『日本国家の特殊性 仏教とそれが日本文化に与へたる影響』(サン・パウロ日本総領事館旧蔵)という貴重書を手に入れた。「意志的仏教」の発露を「武士道」に置き、その現代的体現を「軍隊」とする論述構造、さらに鈴木がブラジル日系移民社会で武士の芸能である能楽普及に大きな役割を果たした人物であったことなど、今後の分析材料を多く含む文献である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 橋本あゆみ	4. 巻 806
2. 論文標題 大西巨人『神聖喜劇』 論理のネットワークを駆けめぐる数奇な旅	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 144-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本 あゆみ	4. 巻 87
2. 論文標題 戦後文学における 老いる身体 との対峙と逃避	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 74～88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50863/showabungaku.87.0_74	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 橋本あゆみ
2. 発表標題 コメント・話題提供 木村政樹『革命的知識人の群像 近代日本の文芸批評と社会主義』「第 部 文学史の整理」
3. 学会等名 「芸術運動と知識人研究会」第2回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本あゆみ
2. 発表標題 写真と動画でめぐる『神聖喜劇』ゆかりの地の現在
3. 学会等名 「芸術運動と知識人研究会」第4回
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

尾西康充著『新しい野間宏 戦後文学の旗手が問うたもの』書評（『社会文学』60号、2024年8月刊行予定、校正作業中）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------